Kaukana yöttömän yön maassa

Masayuki Koike

遠い白夜の国で

Masayuki Koike

小池政行

Kaukana yōttōmān yōn maassa

中央公論社

小池政行（こいけ・まさゆき）

1951年11月、東京に生まれる。成蹊学園高校、青山学院大学を経て、1977年4月、外務省に入る。78年8月から80年5月までヘルシンキ大学に留学。80年5月から84年2月までと，87年10月から92年10月までの二度、在フィンランド日本大使館に勤務する。その間、欧亜局西欧第二課を経て、現在海外広報課に勤める。

遠い白夜の国で

©一九九四　検印廃止

一九九四年　六月一五日初版印刷
一九九四年　六月二五日初版発行

著者　小池政行

発行者　嶋中行雄

印刷所　精興社
製本所　矢嶋製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　〇〇一二〇-四-三四

ISBN4-12-002332-X　Printed in Japan

『遠い白夜の国で』に寄せて

ドナルド・キーン

一九八〇年の初夏、国際交流基金の依頼でヨーロッパの講演旅行に出かけた。英国、スコットランド、デンマーク、フィンランド、ポーランド、ソ連という順序で、それぞれの国の首都に二、三日ずつ滞在する楽しい旅であった。何処に泊っても当地の日本大使館のお世話になって、文字通りの「いたれりつくせり」の待遇を受けた。

各地で私は担当者と親しくなったので、日本に帰ってからお礼のしるしとして自分が書いた本を送ったが、一人の例外を除いて、受け取ったと知らせてくれた人はいなかった。私はちょっとがっかりしたが、後で考えてみたら、便りがないのは当然であった。というのは、私が去った翌日からはきっと別のお客が来られたであろうし、何回も来客の案内をしなければならない大使館員が、一人一人と文通することは不可能だからである。

それにもかかわらず、小池政行さんはちゃんと手紙を下さったばかりでなく、英語で行われた

私の講演をフィンランド語に訳して印刷させ、英語が分らない一般のフィンランド人に読んで貰うつもりでいる、と書いて私を喜ばせた。

数年後、東京で小池さんに再会することができた。場所は六本木のフランス料理店であった。先に着いた私は次から次に入ってくる人々の顔を見ていたが、小池さんが入ってきても初めのうちは分らなかった。というのは、ほっそりとした青年に見えた小池さんが、いつの間にか恰幅のよい紳士になっていたので、ヘルシンキで三日間しか付き合わなかった私は、同じ人かと瞬間的に迷ったのである。後で聞くと、毎晩のように残業のため、外務省で食事を取っていたが、自宅に帰ってからもう一度夕食を食べる習慣が肥満の原因になったそうである。

それ以来、小池さんの姿は余り変っていない。御病気の最も悪い時でも健康そのものに見えた。小池さんの闘病生活の記録を読んでいると、語り手である小池さんは病気で痩せた陰気な人物であるという印象を受けやすいが、決してそうではない。明るくて楽しい人である。小池さんの本の中に私たち二人で御飯を食べるような場面がある。その折、左手が痛くてたまらなかったと書いてあるが、私が鈍感であったためか、小池さんが苦しんでいることに全然気がつかなかった。むしろ大変楽しい一時として私の記憶に残っている。

痛みを隠す小池さんは仕事の上での悩みをも語らない。フィンランド語を自由にしゃべれて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大勢のフィンランド人の友人ができた小池さんは、他の人の嫉妬の的になっただろうが、そのことにほとんど触れない。ただ、次のような文章が組織の冷たさを暗示するように思われる。

「私の場合、病気となったからといって、日本の人からは『どうですか。お大事に』というような言葉をかけられたことはなかった」

が、小池さんに自己憐憫は微塵もない。四十歳にならないうちに命を失う可能性があると知っていながら、嘆くことがない。むしろ、家庭の幸福やフィンランドの大統領はじめ数々の日本人や外国人の友人に恵まれていることを感謝するばかりである。謙虚である小池さんは、どうしてそれほど大勢の友人ができたかを説明しないが、明らかに小池さんに人を引き付ける魅力があるからである。例えば、森下洋子さんはバレエの公演があるたびに、必ず小池さんに招待券を送ってくるが、それは彼女の親切さを物語ると同時に、小池さんの人柄を示すものと考えられる。

小池さんの友人にフィンランド人が特に多いのは、フィンランド語が上手に話せるからだと言えないこともないが、それだけの理由ではない。フィンランドで死に直面していた時、小池さんはこのように書いていた。

「私は特別に欧米の人々に好感を抱くものではないが、フィンランドの人々と日本の人々の間には何か大きな隔りがあった。日本の人々にとり他人の不幸は、つきつめると他人事であるのだが、

フィンランドの人々にとっては、いつの日か自分たちもそうなる可能性があるものとして、他人に情を示す対象なのだと、少なくともその時はそう感じられた」

しかし、小池さんはれっきとした日本人でありながら、他人の不幸を他人事のように思っていない。例えば、フィンランドである所に永年勤めていた知り合いのフィンランドのひとが解雇されたことを日本に帰った小池さんが聞いた時、失業率の高いフィンランドではどんなに優秀であっても、なかなか勤め口は見付けられないだろうと心配し、そのひとのために適当な職業がないかといろいろ探し、やっとのことで見付けたのである。そのひとが解雇されたことは自分の責任ではなかったのに、冷たい目で人を見ることのできない小池さんは、「他人事」として片付けることはない。私も何回も小池さんの細かい思いやりを感じたことがある。

『遠い白夜の国で』は闘病の話だが、小池さんの本は暗い印象を与えない。題名が示すように、小池さんは自然の美に敏感であり、苦しい時でも慰めを得てきた。フィンランドの森と湖、そして澄んだ空気に対する愛着に溢れている。長くて暗いフィンランドの冬をも愛している。

しかし、この美しい国を背景として小池さんの生死の闘争は行われていた。小さい時から祖父や親戚の死を目にしてきた小池さんは、時々フィンランド人の死についてのあっさりした考え方に驚くが、外国の病院で外国人の医師の手当を受けることに、何の違和感も覚えなかった。日本

に帰ってから、フィンランドの医師よりも自分の病気の原因にさらに詳しい日本人の医師に出会った時、もっと早く日本に帰らなかったことはあるいは誤りだったかも知れないと思った、と小池さんは書いている。そう考えることは自然であるし、後悔もあったかもしれない。が、「異境の客」だったために特別の不安を感じたとは思えない。小池さんは本物の国際人なので、医師の技術に差があると分っていても、国を問わず人の親切を忘れない。

重い病いにかかることは一種の試練である。病人は手術が思ったほど成功しなかった場合、絶望して「いっそ死んでしまった方がいい」と思いがちである。小池さんにも絶望に近い感情が時にはあったであろうが、それをのり越えて、このような貴重な体験を伝えてくれたことは、われわれ読者にとっては大いに喜ばしいことである。

「遠い白夜の国で」目次

『遠い白夜の国で』に寄せて　ドナルド・キーン　i
ヘルシンキで入院、手術　3
夏の夜の語らい　48
森と湖の国の秋　83
東京の雑踏のなかで　114
死の時間、生の時間を思う　142
あとがき　161

遠い白夜の国で

ドナルド・キーン博士に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヘルシンキで入院、手術

私は一九八〇年から八四年、そして八七年から九二年と、二度にわたって大使館員としてフィンランドに勤務した。その二度目の勤務の時に私は大きな手術を受けた。二度の勤務の前に、私はヘルシンキ大学で二年間の在外研修を経験し、東京では外務省の欧亜局で北欧各国を担当していた。つまり白夜の国に深くかかわっていた。白夜の国の静けさを好んでいた。

なぜそうなりしかを考えると、どうも誤診を受けていたような気がする。咽頭部に何かあるような気がしたのは、一九九〇年の初め頃からであった。

最初は、外交官という仕事柄、声を使ってフィンランド人と難解なフィンランド語を多く話すからか、またこの年は日本から多くの要人がフィンランドを訪れ通訳をする機会が特に多かったから、これらのことが原因かと考えていた。しかし、どうもおかしいと思い数人の医師に診てもらったが、はっきりした答えは返ってはこなかった。

二度目の勤務で白夜の国に来る前、日本では役所から家に帰るのは大抵午前零時過ぎ、寝る前に緊張をとくためかなりの本を読んでいたから睡眠は少時間、正月や五月の連休は国会休会中を利用して外国訪問を行なう総理か外相に事務官として随行の生活が主だったので、大人になって耳鼻咽喉科に行くはめになったのは、このフィンランドが初めてとなった。

専門医は舌をひっぱり、「ヒーと言って下さい」と真剣な眼差しで私の咽喉をのぞいている。「ヒー」の言葉は、私の悲劇と喜劇の始まりを象徴するのにピッタリの言葉だった。

「ファイバー・スコープを入れて、レーザーで切りましょう」と専門医は言った。私は診断方法と治療方法を一度に言われてとまどった。ファイバー・スコープを入れなければよく解らない病気であることは想像できたが、なぜここで腫瘍を除去するために使うであろうレーザーとの言葉が出てくるのかと。

外国語で医師と話すのは使われる医療用語を理解していないと大変だが、その医療用語を知っていれば、要するに医師と医師が話すようなものだった。医師がゆっくりと時間をかけて患者に明確に病状を説明し、最後に「何か質問は」と言ってくる国で、こちらは医療用語で聞くわけだから医師の答えは簡単、私の気持は複雑だった。

「咽頭の腫瘍ですか」

「そうです」

外は白夜の季節だった。白樺の木々は緑の芽をつけ始めていた。この日から家庭と仕事の間を往復する私ともう一人の私ができた。そのもう一人の私は冷静に自分を見つめてくれるだろう。そう考えることは私自身を救うことだった。

私が長くかかわってきたフィンランドと日本の間で懸案であったフィンエアーのシベリア上空通過便をこの夏から実現するためには、五月末に議定書の両国交換公文の署名式を完了させる必要があった。というわけで検査と簡単な手術入院に必要な三日間をうまく配分しなければならず、議定書交換式の日の午後に入院、翌日レーザーで腫瘍をとってもらい、その次の日に退院してフィンエアー会長の自宅で大統領夫妻も出席するシベリア上空通過便実現を祝う非公式の昼食会に陪席とのスケジュールとなった。

私は仕事と検査入院をうまく調整できたことをうれしがっていた。そしてその私を見つめるもう一人の私は、それを少し哀れと感じていた。

フィンエアー会長の自宅前に大統領夫妻を迎えるために掲げられた白地に青十字のフィンランド国旗を見て、なぜか「いい国だな」と思った。空は青く、日は高く、会長の自宅に隣り合った公園の木々の緑が目にしみるようだった。木々の緑の葉の間からヘルシンキ港の青い海面が見え

た。それは一九九一年五月の末だった。

私は物ごころつくころ両親双方の祖母と祖父の死に遭遇したが、その時のことは葬式の儀式だけが記憶となっている。中学生になって幼い従弟が白血病で死んだ時は、伯父と伯母が大きな床の間にいっぱいに広げて置いた従弟の写真と学用品やおもちゃを見て涙が出た。

六月に三年に一度の休暇帰国で日本に帰った。帰国三日目頃からずっと熱が続いた。一方、妻は膠原病の疑いありとのことで近くの総合病院に十日余り入院した。日本で初めて主夫の経験をした。毎日、妻を見舞に行くたびに両手の痺れと足の裏がいやに浮腫(むく)んだ感じとなるのが気になった。夜、妻を病院に見舞ってエレベーターをおりると、廊下の先で妻の主治医や看護婦たちが重態の患者を地下の集中治療室に運ぶため、他のエレベーターの前で焦っているところだった。看護婦が「どうしたのかしら、きっとまた他の誰かが使用しているのだわ。早く、早く」とエレベーターのボタンを叩き続けていた。主治医が私の顔を認めて苦笑いした。私はどんな顔で彼に応えてよいものか分らなかった。

手の痺れはフィンランドに戻っても消えてはくれなかった。何人かの医師に診てもらい、何度か首のレントゲンをとってもらったら、首の骨がずれていると言われ、何回か首を引張る治療に

通った。しかし痺れのほかに手に痛みが出てくるようになり、良くなる気配は出てはこなかった。

今になって思うと、その頃の私はフィンランドの医師との会話を楽しんでいた面もあった。「頸骨骨膜炎」「頸椎」「頸神経叢」等々と、おそろしく難解な言葉を白夜の国の医師とフィンランド語で交わすことが楽しかった。しかしある内科医、それもヘルシンキ大学中央病院の教授に「患者の死に立ち合ったことがありますか」と馬鹿な質問をしたのは、私の心の底の死への恐怖の本音が出ていた。その医師は一瞬メガネの中の眼差しがきっとなり、頬が少し引きつったように見えた。

「あります」

私はさらに馬鹿なことを尋ねた。

「いやじゃありませんか、精神的にこたえるでしょう」

「いやです。しかし誰にでも死は訪れます。その時は医師として全力を尽くします。患者にもすべて分ってもらえるよう説明します」

私は外国人という立場であまえていたのかもしれない。最後にもっとも意地の悪いと思われる言葉を発した。

「何度も死に接して、先生の精神的な負担はどうするのですか」

医師の答えは聞かない方が良かった。

「忘れるようにします」

私もいつの日にかは医師からも忘れられる。その後、人は統計の数字の中に組み入れられる時がくる。私はフィンランド最大のヘルシンキ大学中央病院の統計数字を調べてみた。年間延べ八万二四六人の患者、八万五三一一の手術、二万六〇四人の集中治療室行きの患者、そして一七九〇人の死。

十一月のある日、白夜の国は吹雪だった。朝、新聞を読んでいたら、核磁気共鳴映像法（MRI）の広告が出ていた。MRIの器械をもつ会社が診断医と技師を雇い、各医療センターから検査を請け負うとなっていた。「痛みもなく、放射線を浴びる心配もない。頸部の診断等に有効である」等々。私は生来の新しもの好きから勇んで検査を受けにいった。受付で「何分ぐらいかかるのですか」と聞いてみたら、「七分ぐらいです」と言われ、これは時間の上でも短くすんでよいと喜んだ。

ストレッチャーがドームの中に入ってゆくとドン、ドン、ドンと静かなバズル音が聞こえてきた。もう七分だろうと思っていると、ドームの中のマイクが「もう少し詳しくとります。じっと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com